命の軽い人間と命の重たい世界の話

月yo

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死が当たり前死んでも復活するので殺しなんて軽犯罪にもなりえない世界で正義の味方として行動していた主人公が命の価値が重く人殺しなんてもってのほかの世界に知らぬ間に転移したけど特に何も考えず暮らしていくお話

周りの視点とのギャップ主人公の勘違いを楽しんでください

小説家になろう　様でも投稿させていただいております　よければそちらもお願いいたします

目次

2　1

4　1

1

気づけばそこに立っていた　自分が何を言ってるのか全く理解できないがそれが現実であり我が身に起こった事実である

おかしい　確かに先ほどまではいつも通りの日常を送っていたはずだ　いつも通りに悪人を懲らしめる依頼を受けいつも通りに悪行を重ねる馬鹿共を更生させるために愛剣を手に戦い数人を叩き切ったところで後ろから頭を勝ち割られ、その後何度か死んだり殺したりして・・・やはり何度思い出してもいつも通りだ

戦っている最中のことは覚えている　だがその後の事は不思議なことに全く覚えていない　頭からすっぽり記憶が抜け落ちている物理的にはいつものことだが記憶がどうこうは聞いたことがないし自分も初めてだ　確か戦っていた場所は暗い洞窟の中の盗賊のアジトだったはずだが　ふと気づいた時には周りを草木で囲まれた森の中だ

どういうことだ?

頭を抱えたくなる気持ちを抑えながらどうしたものかと考える普段そこまで物事を考えないのでどうにも頭が茹で上がっている気がする　いくら考えても自分の一般より劣ったと考える頭で出る答えは無い

とりあえず歩こう、そうすれば何か分かることがあるかもしれない

このまま見知らぬ場所　足りない頭で考えたところで答えが出るはずがない、動けば人なり生物なりに遭遇するだろう　考えることを辞め歩き出す

数分　見知らぬ森を観光気分で歩いていると少し離れたところから自分が最も聞いた　そして許すことのできない人の叫び声　怒声が聞こえてきた勘違いであってほしいと思いながら声のほうに駆け出す、平和のために

成程、やはり見知らぬ土地であろうと人は変わらないようだ

目の前に広がる光景は数々の悪行の現場を見てそしてすべてを解決してきた自分にとってもそれは凄惨な光景だった

ズタボロにされたいかにも冒険者という格好の４人　一番前で仲間であろう３人をかばうように立っている男に至っては　顔がぼこぼこである　それはもう本当にぼっこぼっこである　後ろの三人も腕があらぬ方向に曲がっていたり痣だらけだったりと目も当てられない状況だった

なんてひどい　荒事の現場に慣れている自分でも思わず顔をしかめてうわぁ…ともらしてしまうほどだ　自分のいた土地でもここまでする奴はいないだろう　自分のいた土地も治安が悪いといわれていたが世の中上には上があるとはこういうことか

この惨状はいかにも盗賊といった格好をしている８人の集団がやったのだろう

これ以上は見ていられない　また襲い掛かろうとしてる集団の先頭にいた他に比べいい装備を付けている恐らくリーダー格であろう奴の前に飛び出てその手に持つ短刀を自分の愛剣ではじく

「!?　誰だお前！　こいつらの仲間か?!」

その言葉を無視して改めて盗賊（仮）の獲物を見る　見た目は完全に短剣だしかし刃となる部分が潰され刃物としての意味をなくしている　あれでは鈍器のような使い方しかできないだろう　用途は拷問用？痛めつける様か？　なんておぞましい武器だ、彼はどうやら異常者ともいえるほど精神が病んでいるようだもしくは破綻者か　あのような拷問まがいのことをする奴は自分は聞いたことがない　彼らにはいったん死・ん・で・も・ら・い・その後に話をしよう　なに、精神が通常と判断できるまで何度でも付き合うし今までもそうしてきた

「無視してんじゃねぇ！俺は天下の大盗賊！グ」

名前は後で聞くので今はいったん退場願おう　リーダー格の首を

一太刀で撥ね返す刀で近くで呆然としていた下っ端１　２の首を撥ねる

どうしたことか周りの反応がおかしいなぜここまで呆けているのか　まるで首が飛ぶのを見たことがないような反応だ　少し疑問に思いながら呆然として動けないでいる残りの首も撥ねる

やることも終わったしこれでようやく話を聞けると思い笑顔で後ろの４人に話しかけようと振り向くと何故か全員が意識を失っていた

2

冒険者と呼ばれる職業に就いている者の朝は早い
この冒険者という職業　ランク決めや上下が決められておらず冒険者同士の信頼　信用　実績などで実力を判断していて大雑把に下から　ビギナー　中堅　高位　という3種類に分けられている
分けられているとは言え所詮冒険者同士で勝手に呼んでいるだけで実際にはそんな決まりも存在せず　仕事内容もほとんど何でも屋みたいなもので害獣討伐なんてらしい仕事もあれば庭の手入れ　雑草狩り　果ては下水掃除なんてものもある
そして仕事は早い者勝ち　仕事を選ぶのにランクなんて無いので基本的には早くに仕事の募集を見に行ったほうが割のいい仕事にありつける　だから冒険者は皆朝が早い
害獣駆除等、危険がある仕事は一度実績などを調べられ十分かどうか確かめられてからになる　そういう仕事は最低でも中堅以上じゃないと話にならない　色々危険があり面倒だが見返りは大きいのでそういう仕事専門の上位メンバーはいる　そういう奴らは朝が早いとは言えないので絶対とは言えないが・・

前日に決めておいた場所　行きつけの酒場兼宿屋の中を入り口に立ちながら見渡すが見当たらない
朝に集合するはずだったビギナー達3人は・・・　まだ来てないみたいだな　店内の中央の柱に掛けられている時計を見るが集合の時間の朝6：00を指していた

「はぁ・・　初日から送れるって・・・」
これだから、ビギナーの中でも全くの経験なし本物の初心者のお守りは嫌なんだ

憂鬱になりながらも空いてるテーブルの前の椅子に腰かけた

「あら、おはようローガルさん！今日もお仕事頑張って怪我なんかには気を付けてね！　何かほしいものある？」

「あぁ、おはようミナ　朝から元気だな　取り合えず水と軽くつまめるものをくれ」

「はーい!!」

と笑顔で去っていった

俺に気づいて声を掛けてくれたのは、この酒場の看板娘ともいえるミナだ　飛びぬけて美人なんてことはないが元気があり愛嬌のある顔をしている　チャームポイント（と自分で言っていた）であるサイドテールもばっちりだ　何故か浮いた話は全く聞かないがなぜだろうか・・・

こんなことを考えている　今日もいつもの一日と変わらない少し退屈かもしれないが、それが何時ものことだから良いことなんだろう。

そんな何でもないような事を考えていると後ろから元気な男の声で話しかけられた

「ローガさん！おはようございます！今日はよろしくお願いしますね!!」

振り向くと声の通り見るからに元気そうな男が1人　その後ろに特徴がない男が2人

「あぁ、おはよう・・・」

遅れたことに対しては何もなしか・・

注意はしない今回　こいつらの事を頼まれたのも、依頼として　1度仕事について行って多少助言する事　という内容でしか受けていない　だからいちいち口は出さないし注意もしない

俺はこいつらの先輩ではあるが親でも先生でもない　そういう常識は冒険者を続けながら自分で学べばいい　　俺もそうだったしほとんどの奴等はそうだろう

「早速なんですが、依頼取ってきました！名もない小規模の盗賊団捕縛依頼　その打ち漏らしを捕縛する仕事です！小規模でさらに打ち漏らしのみ　それに今回はローガさんが付いてくれているという事で許可が下りました！」

初仕事にしては少し難しいものを持ってきたが、まぁ俺も同行するし大丈夫か…

「わかった、準備はできてるのか？」

「はい！少しだけ仕事までに時間がありますが準備は終わってます！」

「そうか、ならそれまでここでゆっくりさせてもらうか」

「はい！」

この数時間後、自分の常識が変わる　そしてどこかがおかしい仲間達と旅をすることになるとはさすがに予想もしていなかった

「はぁ？」

なぜこんなことになった？俺はビギナーの初任務に助言をするためだけに付いてきただけなのに

顔は殴られダガーで打たれ　大きくはれ上がってるだろう　後ろ

にいるビギナー達はもう薬がなければ歩くことも難しい
　これは大きな誤算の１つ　小規模だと思っていた盗賊がここらで有名なエルサル盗賊団だったこと　こいつらの相手は正直教会の騎士か熟練の冒険者でないと無理だ　おそらく本隊は全滅だろう

　だが、それはいい　１００歩譲って仕事に失敗することはある　俺もこういう状況は経験があるこの後普通なら身ぐるみはがされ放置される　すぐに教会の人間がやってきて助かるだろう　もし教会で何かあり来なくても　そこで害獣なんかと鉢合わせず街に帰れればまたやり直せる

　だがこれはなんだ

「はぁ？」

　自分の心の内と口から出たのは全く逆の感情だった
　目の前に広がっている光景
　あり得ない
　この世界では起こりえないはずの現象が目の前に広がっている
自分たちを襲っていたこの辺りでは有名な盗賊団　そのリーダーである男の首が宙を舞っている　飛ぶ色は赤　血の色
（なんでこの男は人を殺せるんだ!?）

　この世界で生きる知性ある生物達にとって絶対のルール　どんなにイカれている奴でもどんな大罪人も　貴族　王　半神と言われているあの聖女様でも何があろうと絶対に破れぬルールがある
『知性ある生物をその手で殺める事はできない』
　この世界の創造神か　はたまた別の存在かそれはわからない　だが生まれた時からそのルールは自分の中にあった　それは世界共通

らしくそれが当たり前　常識として育ってきたしおかしいとも思っていない。
　実際冒険者として各国を移動して冒険や依頼をこなしてきた　魔界と呼ばれる地にも足を延ばし　知性なき魔物（害獣）を駆除してきた　がその間知性ある物の命を奪う行為は1度たりとも見たことがない　当たり前だ、それがこの世界の常識なんだから
　そう思って生きてきたこの３１年　神かさらにはその上の存在か
　それが作ったであろう絶対のルールは破られた　目の前に飛び出してきた不思議な装備をしている男によって

　そのあとは早かった脳が理解する間もなく飛んでいく首たち　すべて一刀のもとに撥ねられていく
　宙に舞う　頭　頭　頭
　なんだこれは　夢でも見ているのか俺は？　あり得ないだろ・・・
　あり得ないだろ！　こんな簡単に人が死ぬわけがないんだ‼　人が人を！生物を殺すことができるわけがッ!!
　・・・・・・・・バチン
　頭のあたりから何かが弾ける音が聞こえ、自分の何かが外れた気がする　決まっていた道から弾かれたような　型から外れたというか　繋がれていたはずの鎖が外れた　そんな感じだ　何故か解放感はあるがそれより恐怖　不安が大きい大きな流れから外れたようなそんな感じ　そんな妙な感覚を残しながら意識を手放した

　次に起きた時に見た光景は自分の中の　世界の決まりをぶち壊した張本人が満面の笑みで手を振り挨拶している光景だった
　その後　その光景を見て即座に気絶し男を焦らせることになる・・・
　が知るか！　これからこの男に掛けられる迷惑を考えたら割に合わない　あぁ　胃が痛い

　苦労人の誕生であった